

沖縄県立芸術大学芸術文化研究所

文化講座

「現代沖縄の美術工芸」

講師：小林純子

(沖縄県立芸術大学教授)

1

金城唯喜の沖縄戦体験 ①

十九年に入り、とうとう私にも赤札が舞い込んで来ました。
(中略) 十月十日、いよいよ入隊という日の早朝、那覇の空に爆音が響き渡りました。(中略) 那覇の町をみんな右往左往して逃げ惑い、大声で子供の名前を呼ぶ人や親を探して泣き叫ぶ子供たちなど、大混乱でした。あの火の玉の中を、私はどこをどう走ったのか分かりません。何時間経ったのでしょうか、這々の体で部隊のある読谷村の小学校にたどり着きましたが、もう那覇の方は全滅とのことでした。悪夢のような叫び声が耳に残り、その夜は眠れませんでした。

金城唯喜『返って来た一枚のはがき—我が人生の軌跡—』金城唯喜、2012年、14～15頁

2

金城唯喜の沖縄戦体験 ②

日々厳しい訓練の中、昭和二十年の年も明け、首里にいた石部隊が後方に下がり、代わって私の所属する山部隊が首里に行きました。四月一日、読谷の海岸から米軍上陸、との情報が入ってきました。間もなく、空や海からの集中攻撃が始まり、逃げ場を失った日本軍や住民は、南へ南へと追いやられました。私も首里での激戦で負傷した軍医とともに、後方へ向かっておりましたら、今度は機銃掃射に遭い、軍医はさらに足をやられました。私も腹に機銃を受けましたが、水筒のお陰で命拾いをしました。夜通し歩き、やっと南部の壕まで辿り着きました。(中略) いったい、この小さな島で、何が起きているのか。戦場と化した島は、口では言い表せない、地獄絵そのものでした。幸運にも私は、九死に一生を得て、無傷で終戦を迎えることができました。

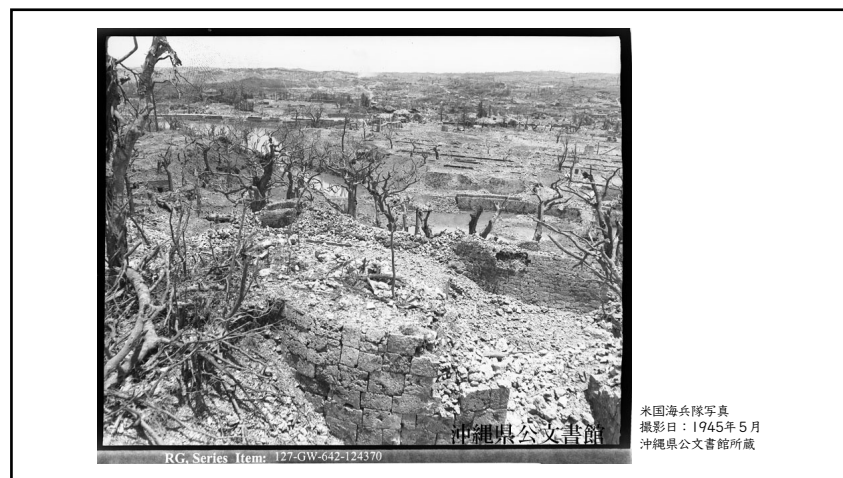
金城唯喜『返って来た一枚のはがき—我が人生の軌跡—』金城唯喜、2012年、16頁

3

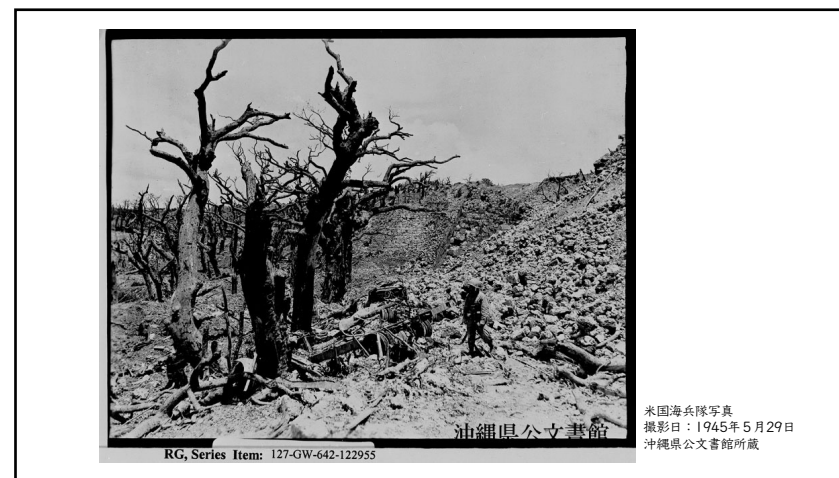


米国空軍写真
撮影地：首里（汀良町？）
撮影日：1945年
沖縄県公文書館所蔵

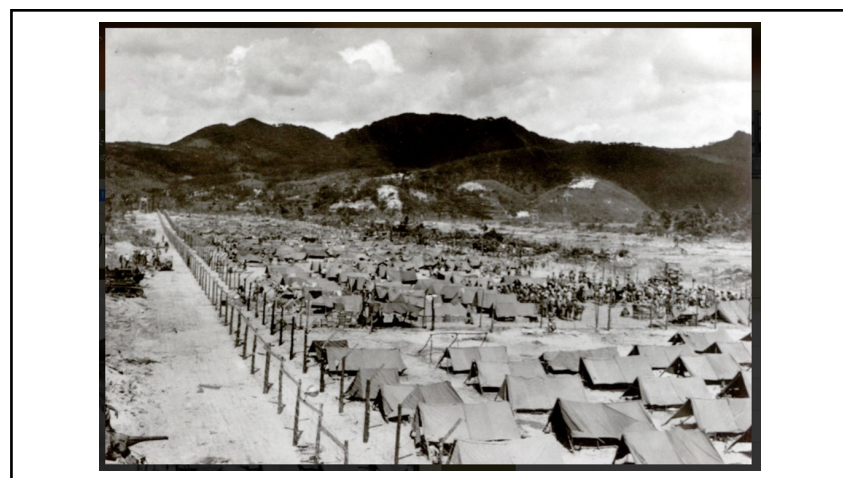
4



5



6



7



8

終戦直後の山田真山の動向 ①

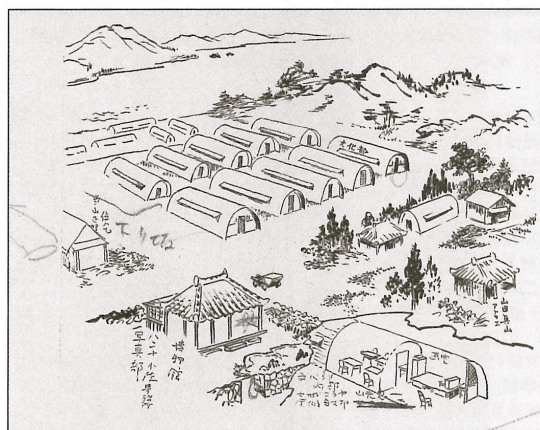
戦後最初に再会した画家は山田真山氏であった。北部の山々を逃げ廻り、降伏して山を降りた部落が瀬嵩であった。そこで山田真山氏にめぐり逢ったのである。氏は米軍から優遇され、画材不足の中で貝殻に彫刻したり、色鉛筆で描いた作品で物資を豊富にうけ、一日二合の配給米で生活している私などとは月とスッポンの違いであった。

大嶺信一「一回顧録—沖縄画壇と私」『琉球の文化』第5号、1974年、154頁

9



10



東恩納軍政府の見取り図（金城安太郎筆）

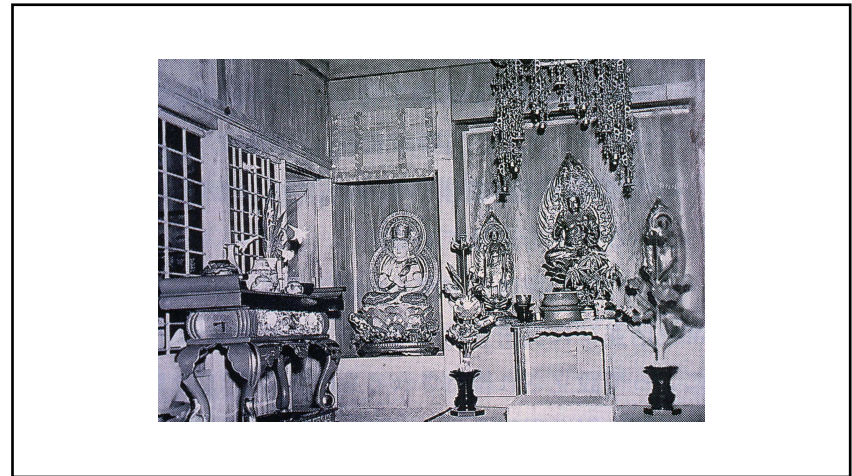
11



12



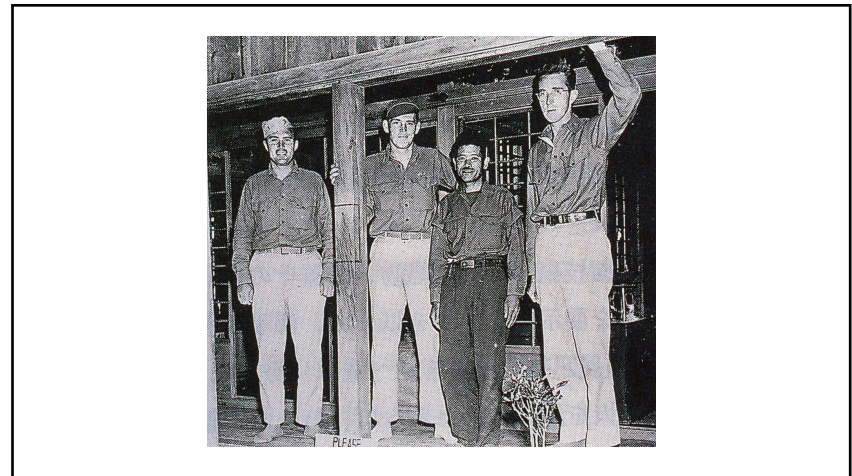
13



14



15



16



17



18



19

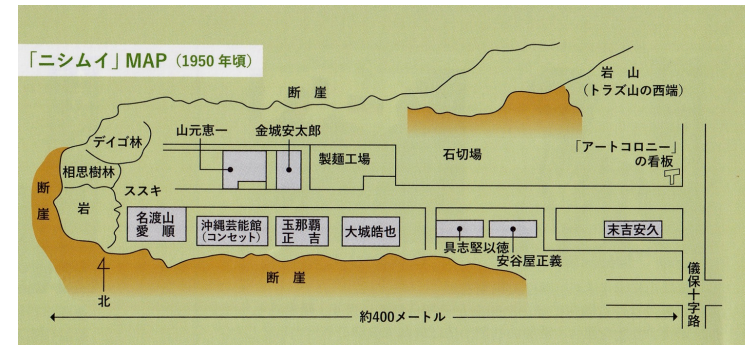


20



21

ニシムイ（北森）美術村

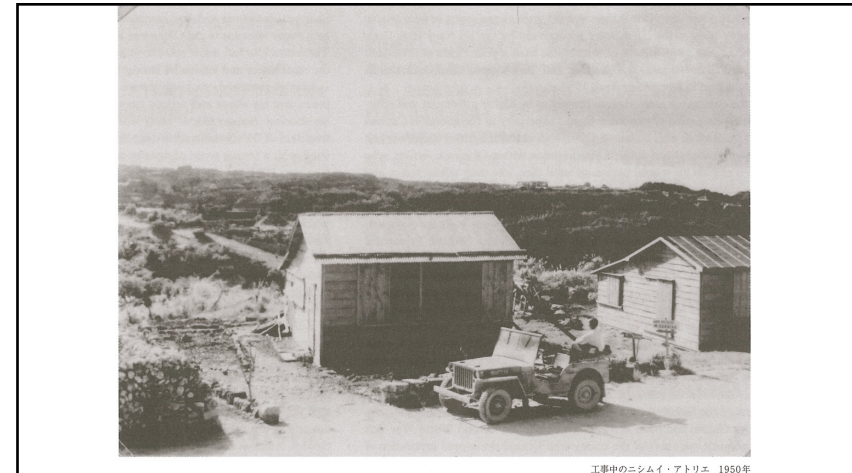


22



大城皓也と名渡山愛順

23



工事中のニシムイ・アトリエ 1950年

24



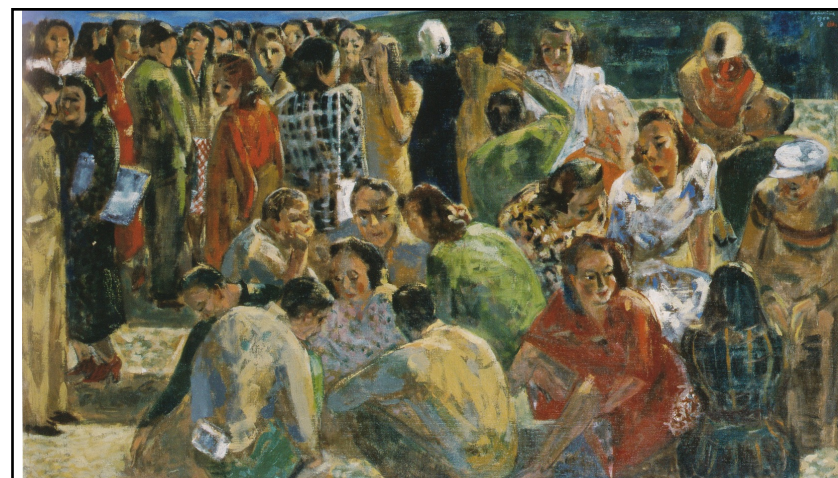
25



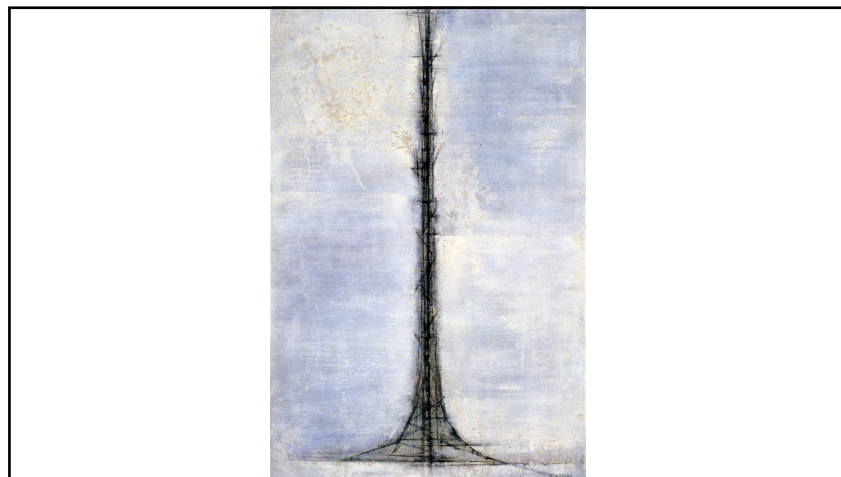
26



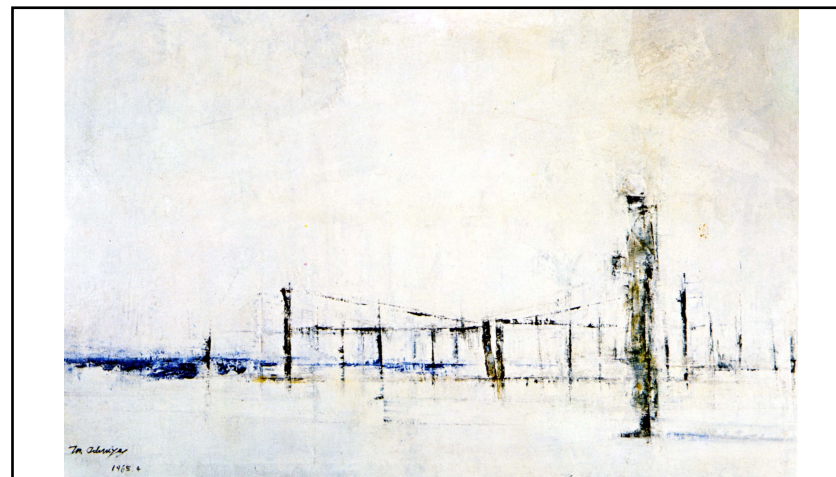
27



28



29



30



31

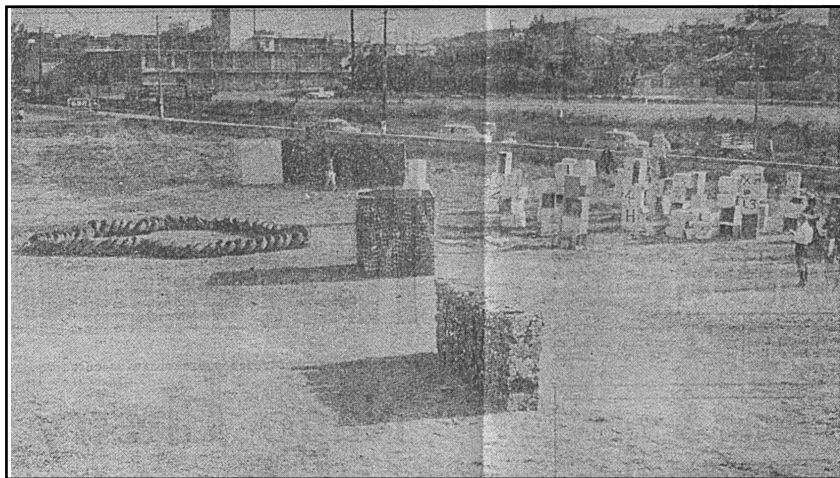
安谷屋正義の沖縄芸術論

戦火によって、心を寄せるべき数々の遺産を失い、又歴史的、地域的、重荷を負わせられた沖縄の芸術家に課せられた苦悩や矛盾は、本土の画家達には想像もつかない程大きい。単純に日本の一地方県として規定するには、余りにも複雑である。今日まで、郷土の心ある芸術家は、この命題を、自己内部にとらえ、個人差はあれ自ら解決すべく苦闘して来たといつてよい。
(中略)

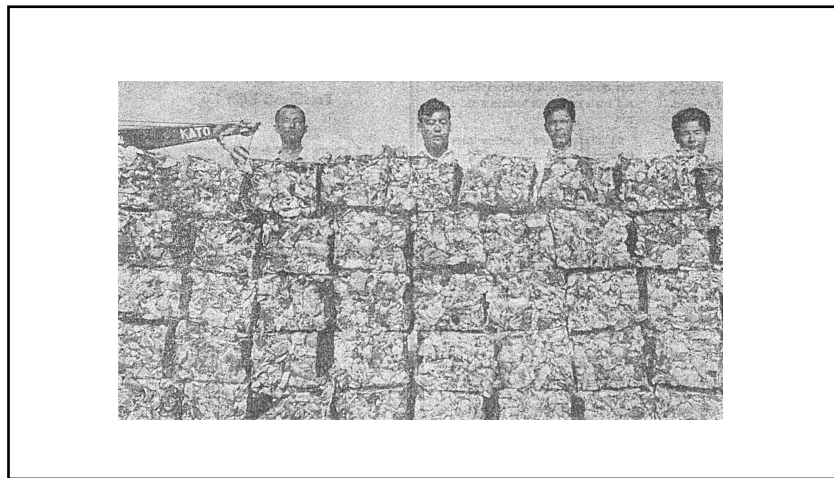
戦後二十年の芸術運動の歩みも、広く新しい絵画価値を求めての上昇運動であると共に、沖縄の置かれた現実を真正面にすえた芸術を通しての、自己確認運動であるといつても過言ではない。

「沖縄画壇の展望とその将来—芸術選賞受賞を時点とする—」『新沖縄文学』第5号、1967年

32



33



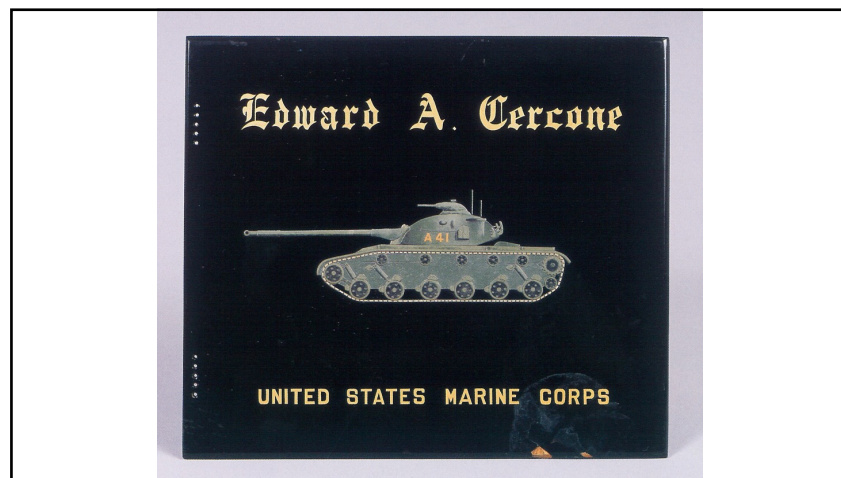
34



35



36



37

豊平良顕の戦後工芸論

したがって沖縄県民は、沖縄の民俗文化を自ら軽視し、疎外した。救い難いコンプレックスを抱いていた。殊に戦時体制下にあつては、島ぐるみ皇民化の洗脳に屈し、戦前、戦時色豊かな「やまと世」に、一八〇度の変貌を遂げたかにみえた。

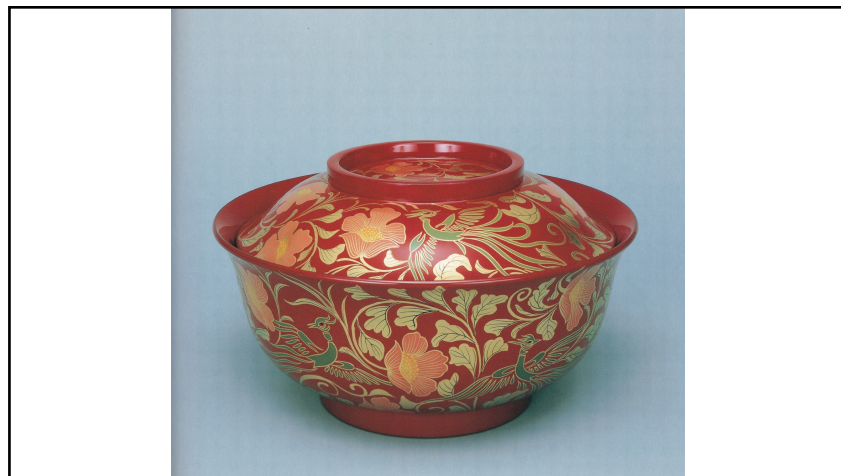
まさに、沖縄喪失の時代である。沖縄の民俗文化はすっかり影をひそめ潰滅状態にあったと言っても過言ではない。阻み難い歴史の流れであつたろう。

(中略)

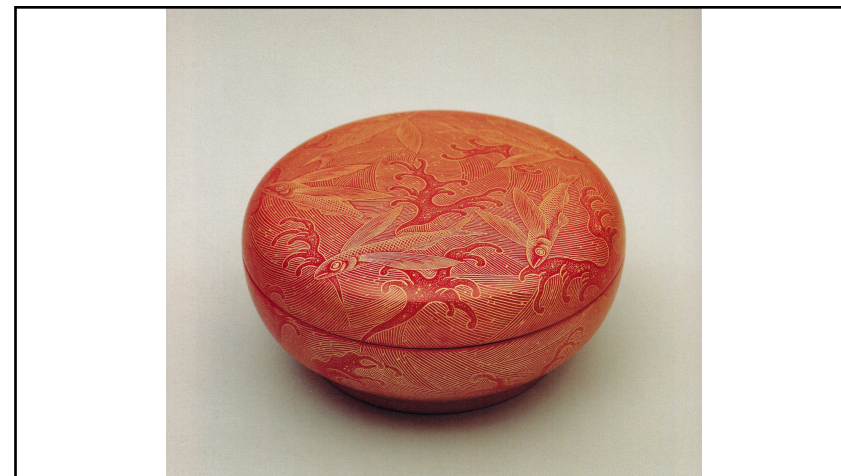
さいわいにも、柳宗悦の蒔いた種子は、前述のとおり、戦後一斉に発芽し、沖縄文化のルネサンスを実現した。沖縄は、過去の苦難の歴史を、神々とともに、そして風土と共存し、柳宗悦が賛美した民俗文化に、一切の生存を托し、それをエネルギー源として、無欲、てんたんに、明るく生き抜いて来た。浄土の美、「民芸のメッカ沖縄」を恣意的な企業の乱開発や、巨大軍事基地との同居で、奪われてはならない。

豊平良顕「沖縄の民俗文化と柳宗悦」『柳宗悦全集 著作編』第15巻（月報7）、筑摩書房、1981年5月

38



39



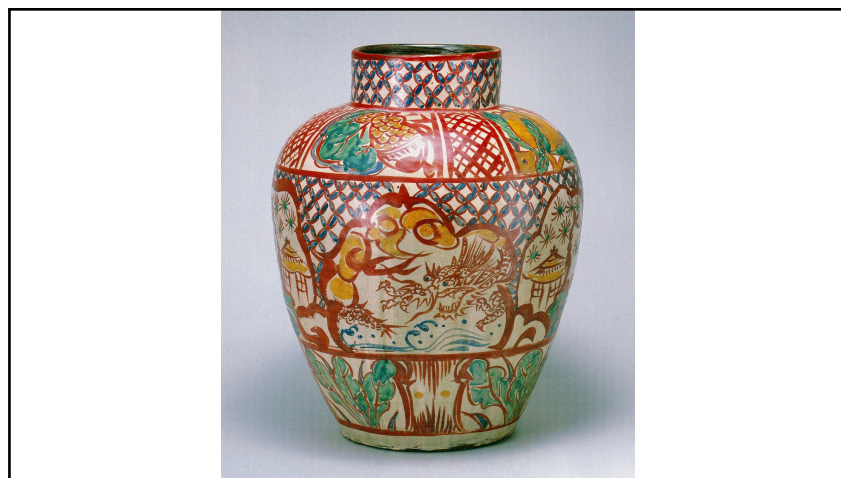
40



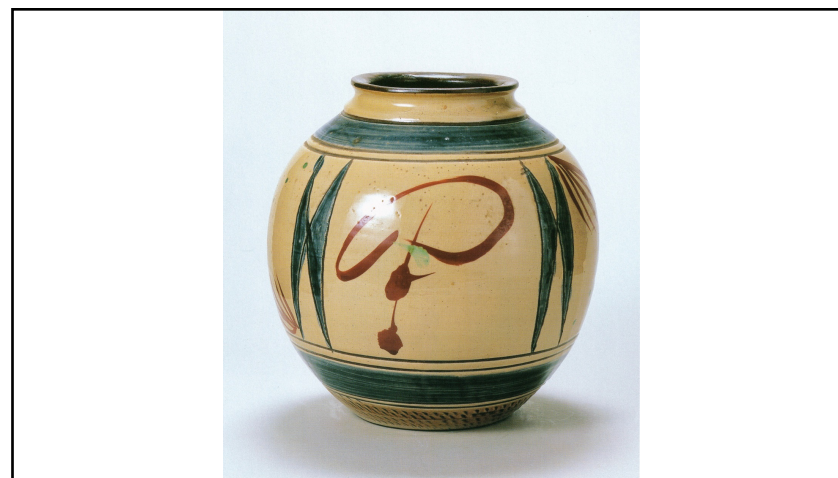
41



42



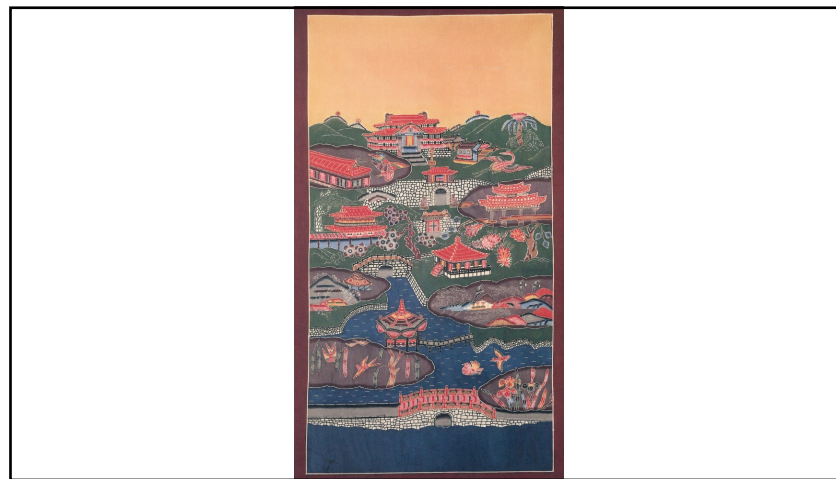
43



44



45



46



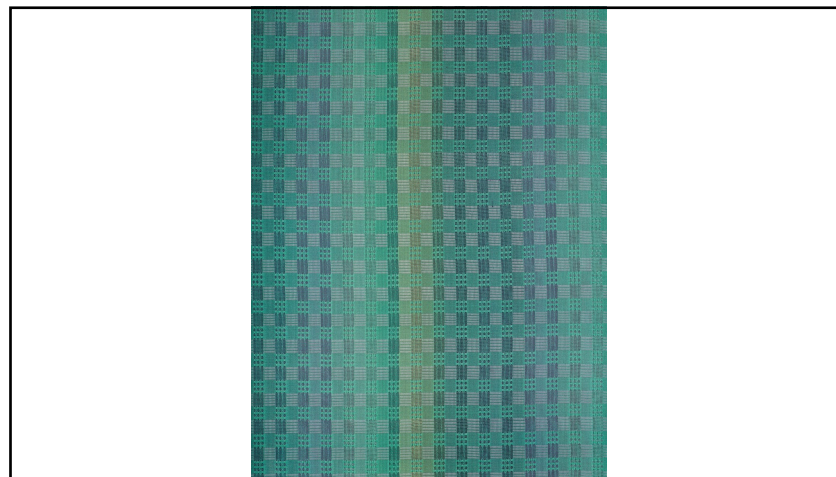
47



48



49



50



51



52